

平成11年度病害虫発生予報 第4号（7月予報）

平成11年6月30日
津軽地域病害虫防除所
南部地域病害虫防除所

【概要】

水稻では、葉いもちが全県的にやや多く、イネカラバエが東青・西北五地域でやや多いと予想される。

りんごでは、リンゴハダニが全県的にやや多いと予想される。

りんご以外の落葉果樹では、ぶどう（スチューハン）の晩腐病が全県的にやや多く、おうとう（晩生種）の灰星病が全県的にやや多いと予想される。

畑作・野菜では、アブラナ科野菜のコナガが全県的に多く、ながいものヤマノイモコガが全県的にやや多いと予想される。

《発生が多くなると予想される病害虫》

アブラナ科野菜	コナガ
---------	-----

《発生がやや多くなると予想される病害虫》

水 稲	葉いもち
	イネカラバエ（東青・西北五地域）
りんご	リンゴハダニ
ぶどう（スチューハン）	晩腐病
おうとう（晩生種）	灰星病
ながいも	ヤマノイモコガ

病害虫に関する問合わせ先

電 話

F A X

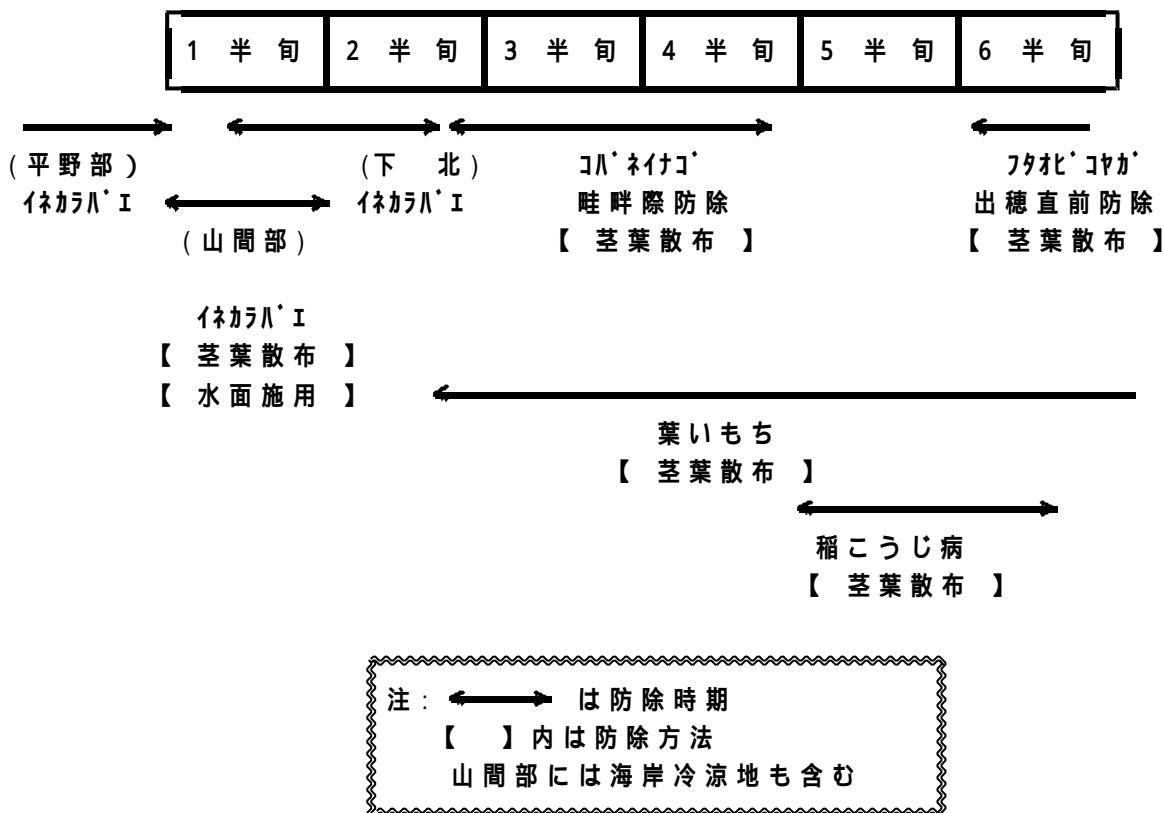
津軽地域病害虫防除所 0172(52)9500 0172(53)3717
南部地域病害虫防除所 0176(23)4290 0176(20)1167

1 水稻

病害虫名	予 報 内 容			予 報 の 根 拠
	発生地域	発生時期	発生量	
葉いもち	県内全域	(初発時期) やや早い 平年値 7月10日	やや多い	6月3半旬から気温が高く経過している。 7月の気温は高い見込みである。
稻こうじ病	津軽地域	-	平年並	前年の発生量は平年並であった。 7月の降水量は平年並の見込みである。
イネカラバエ	東青・西北五地域	(産卵最盛期) やや早い	やや多い	平年より早く産卵が認められた。 4~6月の気温は平年よりやや高く経過した。 前年の発生量が東青・西北五地域では平年よりやや多く、その他の地域では平年並であった。
	上記以外の地域		平年並	
コバネイナゴ	県内全域	(ふ化終期) やや早い	平年並	4~6月の気温は平年よりやや高く経過した。 7月の気温は高い見込みである。 前年の発生量が平年並であった。
フタオビコヤガ	県内全域	(第2世代幼虫ふ化盛期) やや早い	平年並	6月中旬の巡回調査における第1世代幼虫の発生は一部に多い地域もあったが、全体としては平年並であった。 4~6月の気温は平年よりやや高く経過した。 7月の気温は高い見込みである。
ニカメイガ	県内全域	(産卵最盛期) やや早い	平年並	4~6月の気温は平年よりやや高く経過した。 7月の気温は高い見込みである。 前年の発生量は平年並であった。

(1) 防除のポイント

《 7 月 の 防 除 作 業 》



【 葉 い も ち 】

初発時期は平年よりやや早いと見込まれるので、早期発見につとめ、発生を認めた直ちに薬剤を散布する。

薬剤散布1週間後においても病勢進展が止まっているようであれば、再度散布する。

補植用取置苗は発生源となることがあるので直ちに処分する。その際、補植用取置苗でいもち病の発生が確認された場合にはその周辺についても発生していないかどうかよく調べ、発生が確認された場合には茎葉散布による防除を行う。本年は6月16日にむつ市で取置苗にはいもちの発生を確認している。

窒素施肥量が多いといもち病に対する抵抗力が低下するので、適正な施肥管理を行う。

【 稻 こ う じ 病 】

稻こうじ病は、出穂後の粉に病徵が出るが、防除の適期は穂ばらみ期であり、出穂10日～20日前に薬剤を散布する。

穂ばらみ期の低温、日照不足、多雨で発生が多くなるので、このような気象条件で前年発生の見られた水田では必ず防除する。

窒素施肥量が多いと発生が多くなる傾向があるので、適正な施肥管理を行う。

【 イネカラバエ 】

発生量がやや多いと予想されるので、2～3日毎に産卵状況を調査し、産卵株率が80%を超えた日（産卵最盛期）に防除する。産卵状況を調査できない場合は、下表の例年の産卵最盛期を目安に適期防除に努めるが、本年はやや早くなると見込まれることから、およそ3～5日程度早めとする。

イネカラバエに対する茎葉散布の防除効果は、防除適期である産卵最盛期を失すると著しく低下するので散布時期に注意する。

昨年、傷穂の発生が多かった地域では、防除適期の幅が広く（産卵最盛期～10日後）効果が高いジメトエ・ト粒剤を10ア・ル当たり2kg水面施用して防除する。

例年の地帯別産卵最盛期

地 帯	産卵最盛期
平野地帯	6月30日前後
山間・海岸冷涼地帯	7月5日前後
下北地域	7月10日前後

【コバネイナゴ】

出穗期前後の薬剤散布の際に本種にも効果の高い殺虫剤を含む殺虫・殺菌混合剤を散布し、他病害虫と同時防除する。

7月2～4半旬のふ化終期に防除する場合は、畦畔（農道、水路の雑草も含む）及び水田の畦畔際2～3mに薬剤を散布する。

【その他の病害虫】

フタオビコヤガの発生が例年多いほ場では、県農作物病害虫防除基準に準じて適期防除に努める。本年は発生時期がやや早くなる見込みであり、防除適期は7月上旬である。

ばか苗病の発生は全般に少ない見込みであるが、徒長あるいは枯死した罹病株がみられる場合は、罹病株を出穗前に抜取り、土中に埋めるか焼却して、出穗後の幼への感染を防止する。

長距離移動性害虫であるセジロウンカ、コブノメイガの飛来時期は、例年、7月中旬以降であり、今のところ発生時期、発生量の予測はできないが、今後、発表される予察情報に注意し、適期防除に努める。

イネハモグリバエ第2世代幼虫の発生は、全般に少ない見込みであり、ほとんどの地域で防除は不要と思われるが、例年発生の多い地帯では、県農作物病害虫防除基準に準じて適期防除に努める。

ニカメイガは、近年の発生状況から、本種単独の防除が必要となるほ場はきわめて少ないと思われる。しかし、局地的には被害程度の高い地点がみられ、それら地点ではやや増加する傾向もみられる。したがって、前年の発生が目立ったほ場では、出穗10日前に連続50株5か所程度を調査し、被害株率が4%以上の場合には、出穗10日前と出穗初め～出穗期の2回防除する。被害株率が4%未満の場合には、出穗初め～出穗期に1回、他病害虫と同時防除する。

(2)防除上注意すべき事項

当該ほ場の防除対象となる病害虫を見極め、同時防除により効率化をはかる。

粒剤を水面施用した場合は、散布後4～5日間は水を流さないようにする。

いもち病が多発して、散布回数が多くなり、散布間隔も5日ごとに短くする場合には次の点に注意する。

同一薬剤を連用すると、耐性菌の発生する恐れがある。また、同一農薬の散布間隔は、作物への農薬残留の点から7日以上としなければならない。したがって、異なる薬剤を組み合わせて防除する。

稻こうじ病対象のカスミンボルドー、カスミンボルドー粉剤3DL、ラブサイドベフラン粉剤DLは葉いもちを同時防除できるが、穂いもちの防除は出穗期後に必ず実施する。また、出穗10日前以降の銅剤散布は、薬害の恐れがあるので散布時期を厳守する。

2 りんご

病害虫名	予報内容			予報の根拠
	発生地域	発生時期	発生量	
斑点落葉病	県内全域	-	平年並	6月の発生量が平年並であった。 7月の降水量は平年並の見込みである。
リンゴコカクモンハマキ	津軽地域	平年並 (第1世代羽化最盛期)	平年並	越冬世代の発生量が平年並(一部で多い)であった。 フェロモントラップによる成虫の誘殺時期は平年よりやや遅かった。 7月の気温は高いと見込まれる。
	南部地域	やや早い (第1世代羽化最盛期)	少ない	越冬世代の発生量が少なかつた。 フェロモントラップによる成虫の誘殺時期は平年よりやや早かった。
リンゴモンハマキ	南部地域	やや早い (第1世代羽化最盛期)	少ない	越冬世代の発生量が少なかつた。 フェロモントラップによる成虫の誘殺時期は平年よりやや早かった。
キンモンホソガ	津地域	平年並 (第2世代成虫発生時期)	平年並	6月の発生量が平年並であった。 第1世代成虫の発生時期が平年並であった。
	南部地域	やや早い (第2世代成虫発生時期)	少ない	6月の発生量が平年より少なかつた。 第1世代成虫の発生時期がやや早かった。
リンゴハダニ	県内全域	やや早い (増加期)	やや多い	6月の発生量は平年よりやや多かった。 7月の気温は高い見込みである。
ナミハダニ	県内全域	やや早い (増加期)	平年並	6月の発生量は平年並であった。 7月の気温は高い見込みである。

* その他の病害虫：モモシンクイガは平年並に少ない見込みである。

(1) 防除のポイント

【斑点落葉病】

不要な徒長枝は早めに切り取る。

7月中旬に有機銅水和剤、キャブタン・有機銅剤のいずれかを散布する。7月下旬に有機銅水和剤、キャブタン・有機銅剤、アリエッティC水和剤のいずれかを散布する。

7月下旬以降に急増の恐れがある場合は、基準薬剤にポリオキシンAL水和剤1000倍又はロブラール水和剤1200倍を加用する。

ポリオキシンAL水和剤、ロブラール水和剤は薬剤耐性の心配があるので、同一薬剤の連続散布は避ける。

【褐斑病】

前年に発生が多かった園地では、7月下旬の基準薬剤にトップジンM水和剤又はベンレート水和剤を加用する。

【ハマキムシ類】

7月下旬頃にキンモンホソガ防除のためにピレスロイド剤を使用した場合は、次回8月上旬のハマキムシ防除剤は省略できる。

【キンモンホソガ】

7月下旬に硫酸ニコチン液剤、デミリン水和剤、アドマイヤー水和剤、モスピラン水溶剤、ピレスロイド剤のいずれかを散布する。

【クワコナカイガラムシ】

発生の多い所では、越冬世代成虫の産卵前（6月下旬）にバンドを巻き付け、第1世代卵のふ化前（7月中旬）に取り外す。

発生の多い場合は、7月下旬及び8月上旬に防除剤による胴木洗いを行う。

【ハダニ類】

発生状況に応じて適宜ダニ剤を加用する。散布の目安は、園地全体で1葉当たりのハダニ成虫数が2個体以上あるいは寄生葉率50%以上である。

ダニ剤は薬剤抵抗性が出やすいので同一薬剤の連続散布は避け、できるだけ年1回の使用にとどめる。なお、ピラニカ水和剤とマイトクリーンフロアブルは同一薬剤とみなし、どちらか一方を選び、年1回の使用にとどめる。

オマイト水和剤は7月末までの使用を避ける。

根ばやと大枝から発出している徒長枝は早めに取る。

オサダン水和剤は、使用時期が「収穫14日前まで」から「収穫21日前まで」に変更となったので注意する。

3 りんご以外の落葉果樹

病害虫名	予報内容			予報の根拠
	発生地域	発生時期	発生量	
(ぶどう) 晩腐病	県内全域	-	平年並 (キャンヘル・アーリー)	前年、スチューヘンでの発生量が多かった。 7月の降水量は平年並の見込みである。
			やや多い (スチューヘン)	
(ぶどう) 褐斑病	県内全域	-	平年並	前年の発生量は平年並であった。 7月の降水量は平年並の見込みである。
〔おうとう〕 〔晩生種〕 灰星病	県内全域	-	やや多い	中生種では一部園地で実腐れの発生が多かった。 6月下旬の降雨による実割れが多かった。

(1) 防除のポイント

ぶどう

【晚腐病、褐斑病】

スチューベンで晚腐病が多発した場合、7月上旬にビスマイセン水和剤を特別散布する。

7月中旬（大豆粒大）にサニパー水和剤、又はジマンダイセン水和剤を散布する。

とうとう（晚生種）

【灰星病】

収穫2週間前にキャプタン剤、バイコラール水和剤、又はアンビルフロアブルを散布する。

成熟期間中に灰星病の多発の恐れがある場合は収穫7日前頃にラリー水和剤、又はアンビルフロアブルを特別散布する。

収穫前にロブラー水和剤を散布する。

アンビルフロアブルは年間1回の使用にとどめる。

実腐れは摘み取り処分する。

4 畑作・野菜

病害虫名	予報内容			予報の根拠
	発生地域	発生時期	発生量	
(じゅがりも) 疫病	県内全域	-	平年並	7月の降水量が平年並の見込みである。
(きゅうり) べと病	県内全域	-	平年並	7月の降水量が平年並の見込みである。
(きゅうり) 斑点細菌病	県内全域	-	平年並	7月の降水量が平年並の見込みである。
(すいか) つる枯病	県内全域	-	平年並	7月の降水量が平年並の見込みである。
(メロン) つる枯病	県内全域	-	平年並	7月の降水量が平年並の見込みである。
(アブラナ科 野菜) コナガ	県内全域	-	多い	6月の成虫及び幼虫の発生が平年より多かった。 7月の降水量が平年並の見込みである。
(アブラナ科 野菜) ヨトウガ	県内全域	-	平年並	越冬世代成虫の誘殺数及び第一世代卵塊の発生量は平年並であった。 7月の降水量が平年並の見込みである。
(ナガイモ) アブラムシ類	県内全域	-	平年並	7月の降水量が平年並の見込みである。
(ナガイモ) ヤマノイモコガ	県内全域	-	やや多い	前年の発生がやや多く越冬量がやや多いと見込まれる。

(1) 防除のポイント

じゃがいも

【 痘 病 】

平均気温15以上で雨が2~3日続くと発生し始め、20前後で曇天多湿な天候が続く場合に蔓延しやすい。

発生初期から、次のいずれかの薬剤を7~10日おきに散布する。曇雨天の日が続く場合には、晴れ間や小雨の間に散布し、蔓延を防止する。

フェニルアマイド系薬剤に対する耐性菌の発生が確認されていることから、オキサジキシル及びメタラキシルを含む薬剤は連用を避ける。

銅剤とマンネブ又はマンゼブ剤を10日以内に近接散布すると、薬害が発生する恐れがある。

《 防 除 薬 剤 一 覧 表 》

薬 剤 名	倍 数	使 用 時 期	使 用 回 数
4 - 4 式ボルドー液	-	-	-
銅剤	下記参照	-	-
園芸ボルドー	400~800	-	-
コサイドボルドー	500~600	-	-
コサイドDF	1,000	-	-
Zボルドー	400	-	-
I Cボルドー-66D銅水和剤	50	-	3回以内
アリエッティボルドー	500	収穫30日前まで	"
デランK	500	収穫14日前まで	4回以内
フェスティバルC水和剤	400~600	"	3回以内
フェスティバルM水和剤	750	"	"
マンゼブ水和剤	600	収穫7日前まで	7回以内
マンネブ水和剤	600	収穫14日前まで	4回以内
カーゼートPZ水和剤	800	収穫7日前まで	3回以内
ラビライト水和剤	500	収穫14日前まで	5回以内
ダイファーワ和剤	500	"	4回以内
ビスマイセン水和剤	600	"	5回以内
ダコニール1000	500~1,000	収穫7日前まで	"
フロンサイド水和剤	2,000	収穫14日前まで	4回以内
フルオレート水和剤	2,000	収穫30日前まで	3回以内
サンドファンC水和剤	500~750	収穫7日前まで	"
サンドファンM水和剤	500~750	"	4回以内
クリーンヒッター	1,000	"	3回以内
リドミル銅水和剤	400~600	収穫14日前まで	"
リドミルMZ水和剤	500	"	4回以内

注) 敷布量は10a当たり150~180リットル。

印の薬剤はフェニルアマイド系殺菌剤を含む混合薬剤を示す。

[銅 剤] ク'ラビ'ットホルト 400~800倍液、ト'イツホ'ルト'-A 400~800倍液、ト'ウシ'エット 300~500倍液、ハイホ'ルト'ウ 250~300倍液

[マンセ'フ'水和剤] シ'マンタ'イセン水和剤、ク'リーンタ'イセンM水和剤、ハ'ンコセ'フ'水和剤

[マンネフ'水和剤] エムタ'イファ-水和剤、マンネフ'タ'イセンM水和剤、ク'リ-ソエムタ'イファ-水和剤

【 オオニジュウヤホシテントウ 、 アブラムシ類 】

いずれの害虫も春からの天気がよい年ほど発生が多い傾向がある。

オオニジュウヤホシテントウの防除適期はふ化最盛期である。畑の中央部でふ化が始まったときが、ほぼふ化最盛期である。

アブラムシ類は、じゃがいもの生育初期にウイルス病を伝搬することがあるので、発生初期からの防除が大切である。

オルトラン水和剤は両害虫の同時防除が可能である。

きゅうり

【ベと病】

気温が20℃前後で多湿、肥料切れのときに発生しやすいので注意する。

敷わらを早めに行い、雨滴の飛散を防ぐ。

発病初期から5~7日毎に下葉や葉裏にも十分付着するように薬剤を散布する。
発病が激しいときは3日毎に散布する。

【斑点細菌病】

雨が多いなど多湿条件で多発しやすい。

被害茎葉は集めて焼却する。

発生初期から数回、薬剤を散布する。

すいか、メロン

【つる枯病】

連作されている畠や、雨続きで湿度が高い状態が続くと発生が多くなるので注意する。

発生が見られたら、5~7日おきに次表のいずれかの薬剤を散布する。

耐性菌の出現を防ぐために、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。

メロンでは、ポリオキシンAL水溶剤の50倍液を病斑部が隠れるように全体に塗布する。

《防除薬剤一覧表》

薬剤名	倍数		使用時期	使用回数
	すいか	メロン		
ダイファー水和剤	400	400	収穫30日前まで	3回以内
ダコニール1000	700	1,000	収穫3日前まで	5回以内
ロプラル水和剤	1,000	1,000	収穫前日まで	4回以内
マンゼブ水和剤	600	400~600	収穫7日前まで	すいか7回以内 メロン5回以内
ポリベリン水和剤	1,000	1,500	収穫前日まで	すいか4回以内 メロン5回以内
スクレタン水和剤	500	-	収穫21日前まで	5回以内
ジマンレックス水和剤	400~600	-	収穫21日前まで	5回以内
スミブレンド水和剤	2,000	-	収穫21日前まで	5回以内
ベルクート水和剤	1,000	-	収穫前日まで	4回以内
スコア水和剤10	2,000	-	収穫前日まで	3回以内
トリアジン水和剤50	-	400~600	収穫前日まで	6回以内
ポリオキシンAL水溶剤	-	50	発病初期	1回

注) 敷布量: スイカ 10a当たり150~300リットル。

メロン 10a当たり200~300リットル。

アブラナ科野菜

【コナガ、ヨトウガ】

定植間もない株に発生すると被害が大きいので、定植時にオルトラン粒剤、オニコル粒剤5、ガゼット粒剤、モスピラン粒剤、リゲノン粒剤のいずれかを植穴施用し、初期密度を下げる。

コナガ、ヨトウガとも幼虫は老齢になると薬剤の効果が劣るので、若齢のうちに防除する。

コナガは殺虫剤に対する抵抗性がつきやすいので、同一系統の薬剤を連用しない。

同時に発生するモンシロチョウ(アオムシ)、ウワバ類との同時防除を考慮して効率的な防除を行う。

《キャベツのコナガ防除薬剤(乳剤、水和剤)一覧表》

[系統名] 薬剤名	倍数	使用時期	使用回数	同時防除
[有機りん剤]				
P A P 乳剤	1,000	収穫14日前	4回以内	ヨ・ア
アクテリック乳剤	1,000	収穫7日前	4回以内	ヨ・ア
オルトラン水和剤	1,000	収穫7日前	3回以内	ヨ・ア
ジブロム乳剤	800	収穫3日前	-	ヨ・ア
ダイアジノン水和剤34	2,000	収穫30日前	2回以内	ヨ・ア
トクチオン乳剤	1,000	収穫21日前	2回以内	ヨ・ア
ホスパード乳剤	1,000	収穫21日前	2回以内	ヨ・ア
レルダン乳剤25	1,000	収穫7日前	4回以内	ヨ・ア
[合成ビ・レスロイト及び混合剤]				
アグロスリン水和剤	1,000~2,000	収穫7日前	5回以内	ア
サイハロン乳剤	2,000	収穫7日前	3回以内	ア
サイハロン水和剤	2,000~3,000	収穫7日前	3回以内	ヨ・ア
スター・ベリーワater和剤	1,000	収穫21日前	4回以内	ア
チーフメイド乳剤	1,000	収穫7日前	4回以内	ア
テルスター水和剤	1,000	収穫21日前	4回以内	ア
トレボン乳剤	1,000	収穫3日前	3回以内	ヨ・ア
ハクサン水和剤	2,000	収穫7日前	5回以内	ア
ブイボン乳剤	1,000	収穫3日前	3回以内	ヨ・ア
ベジホーリ乳剤	2,000	収穫7日前	3回以内	ア
ベイオフ乳剤	1,500	収穫7日前	4回以内	ヨ・ア
[第3級アミノ類剤及び混合剤]				
エビセクト水和剤	1,000	収穫7日前	3回以内	ア
バダンSG水溶剤	1,500	収穫14日前	4回以内	ア
メラード水和剤	1,000	収穫14日前	2回以内	ア
ルーバン水和剤	1,000	収穫7日前	3回以内	ア
[I G R 剤]				
アタプロン乳剤	2,000	収穫7日前	4回以内	ヨ・ア
カスケード乳剤	2,000~4,000	収穫14日前	2回以内	ヨ・ア
ノーモルト乳剤	2,000	収穫7日前	2回以内	ア
フルアップ乳剤	1,000	収穫7日前	4回以内	ヨ・ア
マッチ乳剤	3,000	収穫7日前	3回以内	ヨ・ア
[B T 剤]				
エスマルクDF	1,000	収穫7日前	4回以内	ア
ガードジエット水和剤	2,000	収穫7日前	4回以内	ア
セレクトジン水和剤	1,000	収穫7日前	4回以内	ア
ゼンターリ颗粒水和剤	1,000~2,000	収穫7日前	4回以内	ア
ダイボーラ水和剤	1,000	収穫7日前	4回以内	ア
チューリサイド水和剤	1,000	収穫7日前	4回以内	ア
デルフィン颗粒水和剤	1,000	収穫7日前	4回以内	ア
トアロー水和剤CT	1,000	収穫7日前	4回以内	ア
トアローフロアブルC	1,000	収穫7日前	4回以内	ア
バシレックス水和剤	1,000	収穫7日前	4回以内	ヨ
[クロロニコチル剤]				
モスピラン水溶剤	2,000	収穫7日前	6回以内	ア
[クロルフェナビル剤]				
コテツフロアブル	2,000	収穫7日前	2回以内	ヨ・ア
[マクロライド]				
アファーム乳剤	1,000~2,000	収穫7日前	3回以内	ヨ・ア

注) 敷布量: 10a当たり150~200リットル。

同時防除が可能な害虫 ヨ:ヨトウガ ア:アオムシ

[PAP乳剤] エルサン乳剤、バブチオン乳剤

ながいも

【アブラムシ類、ヤマノイモコガ】

アブラムシ類は、吸汁による直接害のほか、ウイルス病を伝搬することがあるので、発生初期からの防除を徹底する。

ヤマノイモコガは、萌芽時に先端を食害し、分枝つる発生の原因となるので、この時期の防除は特に徹底する。

DDVP乳剤(50%)、アディオン乳剤はヤマノイモコガにも有効である。

《防除薬剤一覧表》

薬剤名	倍数		使用時期	使用回数
	アブラムシ類	ヤマノイモコガ		
DDVP乳剤(50%)	1,000	-	収穫3日前まで	6回以内
アディオン乳剤	2,000	-	収穫7日前まで	5回以内
マフリック水和剤20	2,000~4,000	2,000~4,000	収穫7日前まで	4回以内
トレボン乳剤	1,000	1,000	収穫14日前まで	3回以内
メラード水和剤	-	1,000	収穫14日前まで	2回以内

注) 敷布量: 10a当たり200~400リットル。

[DDVP乳剤(50%)]: DDVP乳剤50、デス、ホスピット乳剤、ラピック、DDVP 50%乳剤

7月の病害虫テレホン情報案内

(津 軽 地 域) 電 話 0172(53)0033

月	旬	水 稲	果 樹	畑作・野菜
7	上	ばか苗病株の抜取り	斑点落葉病とモモシンクイ カの防除	
	中	葉いもちと稻こうじ 病の防除	斑点落葉病の防除	すいか・メロンの病 害虫防除
	下	葉いもちとコハ・ネイケコ の防除	斑点落葉病とキンモンアリ カの防除	にんじんの黒葉枯病 防除

(南 部 地 域) 電 話 0176(24)0088

月	旬	水 稲	果 樹	畑作・野菜
7	上	7月病害虫発生予報について		
	中	いもち病、稻こうじ 病及びコハ・ネイケコの発 生状況と防除	りんご斑点落葉病と ハダニ類の防除	キャベツのコナガの 発生状況と防除
	下	いもち病とコハ・ネイケコ の発生状況と防除	りんご斑点落葉病と ハダニ類の防除	キュウリとネギの病 害虫の発生状況と防 除

なお、テレホン情報は、病害虫の発生状況により変更することがあります。

・青森県農薬危害防止運動を実施中・

運動実施期間 平成11年6月15日～8月14日

農薬の取り扱いを誤ると人や家畜、蚕、ミツバチ、水産動植物や周辺環境に何らかの影響を及ぼす恐れがあります。

農薬を使用する場合は、農薬の使用基準を良く守り、農薬による事故を無くしましょう。また、病害虫の発生予察情報等を参考にしながら、必要最小限の農薬を使用し、環境にやさしい農業を推進しましょう。

農薬散布に当たっては、次の事項に注意しましょう。

散 布 前

ラベルを良く読む。

農薬の容器には、使用方法、使用上の注意などが書かれているので、使用前に良く読む習慣をつける。

ホースの接続部分などが不良でないか等、防除器具や防除施設の点検をする。

農薬用マスク、保護メガネ、手袋等の防護具を着用する。

過労や病気あがりなど健康状態が悪い場合は作業をしない。

散布地域の水道や河川の汚染を防止し、住宅や通行人、家畜、蚕等に被害を及ぼさないよう危害防止に努める。

散 布 時

散布作業は、風の強くない、朝夕の涼しい時間を使い、2～3時間ごとに交替して行う。

温室やビニルハウス等の敷地内で散布する場合は、施設内に農薬がこもり、作業者の体に着いたり吸入の危険があるので、服装を厳重にしたり専用の防毒マスクを着用する。

土壤くん蒸剤を使用する場合は、薬剤が揮散して周辺に影響を与えないよう風向きなどに十分注意するほか、被覆を完全に行う。

散 布 後

作業後は、手足はもちろん全身を石けんでよく洗うとともに、眼を水洗し衣服を毎日取り替える。

農薬は、安全な場所に鍵をかけて保管する。特に、臭化メチルなど揮発性の高い農薬は、住居や隣接する建物に保管しないようにする。

農薬の誤飲を防ぐため、清涼飲料水の空容器などに移し替えない。

農薬は全て使いきるようにし、余った場合、不法に廃棄しない。空容器、空袋等は、関係法令等をよく守り、廃棄物処理業者への処理を委託するなど適正に処理する。（野焼きや不法投棄は止めましょう）